☆Live Bar雷神Presents：ばぐーす長谷川のロック向上委員会☆

『第5回：••ポップを聴こう』
～キーワードはパワー・ポップ～

今回のテーマはポップなロック。と言っても、ハード・ポップやらポップ・ロックやらキャッチーなロックやら多くの言い方が存在します。そして、バンドそのものがそう言った言葉に当て嵌まらなくとも、「激しさの中に光るポップな感性」とか、「美しくメロディアスでポップな楽曲」とか、「ポップで売れ線狙いの作品だ」等と『ポップ』という言葉はロックというジャンルの中でも頻繁に出てくる言葉ではないでしょうか。

この“ポップ”という言葉を悪く捉えるむきもありますが、メタルであれ何であれ、どんなに骨太なロックを展開するバンドでも、キャッチーだったりポップな楽曲は存在します（そうでないのも有りますが）。そんなことをフト思いながら選曲しました。ただあまりにも範囲が広くなるので、今回は【パワー・ポップ】をキーワードにしていきます。

有名どこからB級と呼ばれるバンドまで、ポップなロックを楽しんでいきましょう♫

▪パワー・ポップの源流：英国

1: Badfinger / Know One Knows (Wish You Were Here : 1974)

現在でも高い人気を誇るBadfingerのWarner Bros第2弾/ラスト作。Warnerとの契約上、同年に2枚のアルバムをリリースしているが、そんな状況でも良い曲が満載。その創作能力に驚愕させられる1枚。バンドらしさとしてもBadfinger史上最高峰で、オリジナル最終章という意味や雰囲気も含め、ビートルズのAbbey Roadのような作品でもある。ちなみにこの曲にはサディスティック・ミカ・バンドのミカによる日本語の語りが入っているのが特徴的だ。

https://www.youtube.com/watch?v=cjoYfO24I68

▪パワー・ポップの源流：米国

2: Raspberries / Let's Pretend (Fresh : 1972)

Raspberries:の2nd作(1972年デビュー)。バンドとしての成長振りを見せつけてくれたアルバムで、最強のメロディを誇る“Let's Pretend”と骨太な“I Wanna Be With You”の2大ヒットが収録された作品。「甘酸っぱい」メロディアスなナンバー、カントリー・テイスト溢れるナンバー、さらに前作よりタイトでハードなナンバーとのコントラストが良い塩梅で収録。ポス

ト・ビートルズとも言われ、ポール・マッカトニーと同じく最高のメロディ・メーカーと言われたエリックとRaspberriesの、魅力満載な名作だ。
https://www.youtube.com/watch?v=IJ9UdfBKv1U

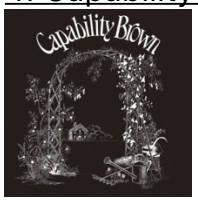
▪マニア感涙：グラム・ロック/パワー・ポップ/ハード・ロックの間

3: Blackfoot Sue / Care To Believe (Strangers : 1974)

1972年デビュー。英バーミンガム出身: Blackfoot Sueの2nd/ラスト作。メロディ際立つナンバーと、プログレに足を突っ込んだ楽曲等が混在した秀作である。ハードながらもウキウキさせてくれるメロディセンスが本当に素晴らしい。さらに、ドラマティックな展開とアレンジを上手くミックスさせた技も聴きどころだ。キャッチーなセンスと重厚なHRマナーを兼ね備えた素晴らしきB級バンド。
https://www.youtube.com/watch?v=qhVoPAwGRf8

▪マニア感涙：パワー・ポップ/プログレ/ハード・ロック/フォークの間

4: Capability Brown / Do You Believe (From Scratch : 1972)



英Soft Rockの雄：Harmony Grassが前身のCapability Brownの1st作。ハーモニーをメインにしたバンドでありながら、インストゥルメンタル・アレンジが複雑且つ秀逸。それによりプログレのファンから人気が高い。英特有の牧歌的なFolkとHRな雰囲気をも纏った作風は、まるでジャンルの横断のよう。このごった煮加減が英国ならでは。重いグルーヴで支えられていることで、HRファンにもウケが良いバンドだ。2ndの方がジャケ写も含め有名なのだが、私的には先ずこちらを推す。
https://www.youtube.com/watch?v=qDP0WYytdlw

▪パワー・ポップの源流：米国その2

5: Big Star / September Gurls (Radio City : 1974)

1972年デビュー。カルト・スター：アレックス・チルトン率いるバンドの2nd作。1stではクリス・ベルとの2巨頭であったが、早くも音楽的対立によりクリスは脱退している。ほぼ一発録りであろうゴツゴツとした感覚と、アレックスの煌びやかなカッティングがサウンドの中心に

なり、これぞ「パワー・ポップ」な様相を呈するアルバムに仕上がっている。90年代以降の、ギター・ポップと呼ばれる1つのジャンルが目指した最高峰のロックがここに在る。
https://www.youtube.com/watch?v=7kbYVZ8eR-o

▪マニア感涙：パワー/ハード・ポップなB級バンド

6: MR. BIG (UK) / Wonderful Creation (Sweet Silence : 1975)

英国B級マニアの中でも人気の高いDicken率いるMR. BIG (UK)の1st作。当時は日本でも露出度が高く人気のあったバンドだ。ハードで実験性豊かでメロディは秀逸でドラマティックということで、QUEENと比較されることが多かったようだが、それも納得のサウンド・楽曲が詰まっている。ツイン・ドラムで重いグルーヴを叩き出し、その上にDickenのVoと秀逸なメロディが交差する様はとてもスリリング。次世代の英国ロックの主役と言われていたのも頷けるだろう。
https://www.youtube.com/watch?v=7zXChGKSYWU

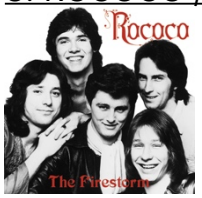
▪パワー・ポップの名作と呼ばれて

7: Pilot / Too Many Hopes (Morin Heights : 1975)

Pilotの3rd作(1974年デビュー)。プロデュースはロイ・トーマス・ベイカーで、そのせいか過去作より展開の早いハードな作品に仕上がっている。後年この作品は「パワー・ポップの名作」と言われるようになるが、リリース当時は良い成績を収められなかった不遇な作品でもある。QUEENを真似てか、これまでハンドクラップを多様してきたPilotがこの作品では「No Handclaps」とし、これまでの自分達と決別するかのような試みも施されている。
https://www.youtube.com/watch?v=Vy0vVavi4Jc

▪マニア感涙：シングル2枚で消えたパワー・ポップなバンド

8: ROCOCO / Baby J (The Firestorm And Other Love Songs : 2011)



1973/76年と、たった2枚のシングルをリリースし消えてしまったバンドの発掘盤。リアルタイムで「LPをリリースしていないLondon No.1バンド」と評価されており、隠れた人気を誇って

いた。パワー・ポップ然とした楽曲のみならず、プログレや英国田園Popsの顔も持った英国らしいバンドである。PilotやBadfinger、10ccはもちろんのこと、マニアックだがプログレ界で人気を誇るGarden Shedあたりの匂いも。21世紀以降出てきたヨーロッパのメロディアス・プログレ勢にも通じる秀逸なバンド。
https://www.youtube.com/watch?v=U5O9R9chVGY

▪一発屋ですが何か？パワー・ポップの極み

9: The Knack / My Sharona (Get The Knack : 1979)

誰もが知っていると言っても過言ではない名曲：My Sharona収録の1st作。「ビートルズの再来」とプロモーションされ認識されているが、もっとハードでパンキッシュなサウンドを誇った内容である。一般的にはMy Sharonaのみの一発屋と思われているが、Doug Fiegerのソングライティング力は只者ではなく、他楽曲も素晴らしきパワー・ポップな曲ばかり。そして、Disco/AOR全盛期に切り込み隊長のようにパワー・ポップをかましてくれた功績は大きい。
https://www.youtube.com/watch?v=g1T71PGd-J0